

徒然の記 その五

浄火

浄火とは、神さまや仏さまに捧げる神聖な火のことです。

昔は、どこの家にも神棚があり、燈明(とうみょう)が灯されていました。

今はろうソクの火で代用することが多いようですが、昔は「燈明皿」の中に「ナタネ油」を入れ、その中に燈芯(とうしん、イグサ科の燈芯草の髓=ずい)を浸して燃やしていました。

燈明は、浄火そのものですから、人の作り出した不浄なマッチで火を付けるなどはもつてのほかでした。

父が出征する前の我が家では、昔ながらのやり方…一家の主である父が、身仕舞(みじまい)いを正して「火打石」と「火打ち金」を使って「火口」(ほくち、ほぐち=燃えやすい炭の粉の

ようなもの)に向かって「切り火」を飛ばして火を

付けていました。

「火口」に火がつくとそれを「付け木」に燃え移らせて「燈明皿」の中の「燈芯」に点火するのですが、手の込んだやり方は、子供の目には、まるで厳かな儀式のように見えました。

テレビや映画で、捕り物に出かける平次親分を、女房のおしずが「切り火」を切って送り出すシーンがありますが、あれを見ると、つい、神棚の下の父のことを思い出してしまいます。ちなみに出がけの「切り火」は、身を清めるための火です。

古来から火の神様は家を守る最高の神様とされてきましたが、昔の人は、火には魔除けの力があるとも信じていました。

「切り火」は、身辺の邪を払うためのおまじないだったのです。

おしずさんは、連れ合いの平次が出先で危険に出遭わないよう、災難除け・厄除けに「切り火」を切っているのです。

煮焚(にた)きする時に火を使うため、昔の人は台所に火の神様…カマドの神様の「三宝荒神(さんぼうこうじん)」を祀(まつ)っていました。

我が家の台所にも荒神様がありました。

三宝とは「仏・法・僧」のことで、仏はお釈迦様、法はお釈迦様の教え、僧はその教えを広める人たちのことです。

荒神様は、一般の家庭なら台所に、飲食店なら厨房(ちゅうぼう)に祀られていました。